

2) いちごから採集したヒラズハナアザミウマの薬剤感受性検定結果

(1) 目的

いちごから採集したヒラズハナアザミウマの薬剤感受性検定を行い、今後の防除対策の資とする。

(2) 材料および方法

供試虫

2011年4月に、県内4地点のいちごハウスからヒラズハナアザミウマを採集した。それらをソラマメの催芽種子を餌として、25℃、16L8Dで累代飼育し、得られた個体群の雌成虫を供試した。

供試薬剤

供試薬剤は表1に示す3剤とした。薬剤は規程の濃度に希釈し、展着剤(マイリノー(20000倍))を加用した。登録されている希釈倍率に幅がある場合は、濃度の薄い倍率で検定した。対照は展着剤のみを加用した溶液を用いた。

表1 供試薬剤及びその希釈倍率

系統名	薬剤名	商品名	希釈倍率(倍)
ネオニコチノイド系	アセタミプリド水溶剤	モスピラン水溶剤(N社製)	2,000
スピノシン系	スピノサド水和剤	スピノエース顆粒水和剤(K社製)	5,000
スピノシン系	スピネトラム水和剤	ディアナSC(S社製)	5,000
対照	水道水+展着剤		

検定方法

検定は食餌浸漬法により行った。インゲンの初生葉を、希釈した薬液に、薬液がよく付着するように攪拌しながら10秒以上浸漬した後、風乾し、そこからリーフディスク(直径約30mm)を作成した。アクリルパイプ(直径25mm、長さ20mm)にリーフディスクを葉裏が容器内面に向くように置き、パラフィルム2枚で封をした。この処理時、乾燥を防ぐため、小さく切ったキッチンペーパーを湿らせてリーフディスクとパラフィルムの間に挟んだ。リーフディスクのある方を容器の底面とし、容器内に供試虫を約20個体放飼した。放飼後、容器の上部はパラフィルム2枚で封をした。その後、その容器を25℃、16L8Dの人工気象器内に静置し、48時間後、生存個体数を計数し、補正死虫率を算出した。検定は1薬剤につき3反復行った。

(3) 結果

結果は表2に示した。

モスピラン水溶剤の補正死虫率は全般に低かった。

スピノエース顆粒水和剤、ディアナSCの補正死虫率は高かった。

表2 各種薬剤によるヒラズハナアザミウマの補正死虫率

商品名	希釈倍率 (倍)	各地点の補正死虫率(%) ^{注1)}			
モスピラン水溶剤(N社製)	2,000	65.1	22.7	47.9	34.5
スピノエース顆粒水和剤(K社製)	5,000	100.0	98.5	100.0	100.0
ディアナSC(S社製)	5,000	100.0	100.0	100.0	100.0
対照(水道水+展着剤) ^{注2)}		(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)

注1) 補正死虫率(%) = { (対照生存虫率 - 処理生存虫率) / 対照生存虫率 } × 100

注2) 対照の括弧内の数字は生存虫率を示す